# 教育学研究室の思い出

石川裕之（教育・昭和５６年卒）

学生時代、もう４０年近く前になる。大学入試を突破して私が入ったのは、教育学研究室。何それ？、国語や数学の研究室ではない。当時、宇川教授という偉い先生がいらして、次のように話された。

「皆さんは、国語や社会、理科など１つの教科にとらわれないで、広く教育とは何かを問い続ける研究の分野に入った。素晴らしいことだ。頑張って学んでほしい。」

しかし、教員免許、特に中学・高校の免許をとるには、何か教科の単位を取得しなければならず、先輩方から聞いたのは、「社会科がとりやすい」であった。ということで、私は何の疑問も持たず社会科の授業をせっせと受けていた。

教育学研究室、略して“教研”、狂犬ではない。旧校舎の２階だか３階に学生の小さな研究室があった。建物が古い上に、長い先輩たちの歴史が刻まれていて、壁やガラスにいろんな物が貼られたり剥がされたりして結構汚かった。隣に教育心理学や特殊教育などの研究室があった。その奥には教授たちの研究室も。

夜には、その研究室で“野郎会”と称して数少ない男子の先輩たちと飲んだり歌ったりしていた。もちろん研究室は、研究室であって居酒屋ではない。教授たちも広い心と温かい目でうるさい我々男子学生を見守っていてくださったに違いない。

近くに西宝寺という由緒あるお寺がある。そこで我々は、“新入生歓迎コンパ”をしていた。コンパなどという言葉は今も使っているのか不明だが。

飲んでばかりいたわけではない。少しは勉強もした。わたしは、社会教育を専攻した。渡辺安男先生だった。東北地方出身で、話し方に独特の東北なまりがあった。私は、讃岐弁とは違う聞き慣れない旋律が新鮮に感じられて、渡辺先生の東北なまりをよくまねしていた。おかげで東北なまりは上達したが、学業は、ぱっとしなかった。残念。

渡辺ゼミでは、地域に出て行って住民や社会教育団体の関係者に意識調査を実施していた。我々学生も一緒にお供して、調査研究をした。そのときは、今の綾川町にある昭和公民館に本部を置いて、地域調査をおこなった。その後、大学にもどり１枚１枚のカードにデータを打ち込んで結果をまとめたりクロス集計をしたりしていた。ずいぶん手間暇のかかる作業だった。大学にとんでもなく大きなコンピュータがあって、両側に穴の開いた用紙に調査結果が記録されて、印刷機からガーガーと音を立ててはき出されていたのを思い出す。

教育学研究室、いろいろ苦労もあったが、先輩後輩、そして先生方との強い絆で結ばれた思い出の場所である。